

七夕の歌一首 并せて短歌

四一二五番

天照らす 神の御代より 安の川 中に隔てて
 向かひ立ち 袖振りかはし 息の緒に 嘆かす児
 ら 渡り守 舟を設けず 橋だにも 渡してあら
 ば その上ゆも い行き渡らし 携はり うな
 がけり居て 思ほしき 言も語らひ 慰むる
 心はあらむを なにしかも 秋にしあらねば
 言問ひの 乏しき見ら うつせみの 世の人我も
 ここをしも あやに奇しみ 行き変はる 年のは
 ごとに 天の原 振り放け見つつ 言ひ継ぎにす
 れ

反歌二首

四一二六番

天の川 橋渡せらば その上ゆも い渡らさむを
 秋にあらずとも

四一二七番

安の川 い向かひ立ちて 年の恋 日長き見らが
 妻問ひの夜そ